



田村 敏枝さん  
(富士見町横室)

6歳のときに当時  
居住していた市街  
地で前橋空襲を体  
験し、生家を焼失  
した。

終戦から77年、戦争体験者は年々減少し、戦争の記憶は徐々に薄れていきます。しかしこれは未来の平和のため、忘れてはいけない記憶。さまざまな方たちで、記憶を後世へ伝えるときです。

# 戦争体験者からワカモノへ

本紙の市民編集員・ワカモノ記者が戦争体験者へインタビュー。空襲や当時の生活について話を聞きました。  
文・ワカモノ記者・梶田結衣、中村しずく

## 6歳の空襲体験

田村さん「普段とは違う様子に、子どもながらに緊張していたと思います。枕元には常に防空頭巾や靴など、すぐに逃げられる準備をしていました。空襲は夕方から夜の間にあるため、電気の明るさで人の位置が特定されないよう灯火管制がありました。そのため、警報で起きると、薄暗い中で着替えて防空頭巾をかぶり、母と弟と一緒に外へ出ました。利根橋の方向

に明るく大きなものがユラユラとうごめいているのが見えて、何だろうと不安に思ったのを覚えています。少し行ったところに防空壕がありました。人が入りきららず、母は防空壕のふたのようになりました。記憶があります。私は爆弾の落ちる音が怖くて泣いていました。近くの建物にも火が回ったため私たちはさらに先へ逃げました。道中には風呂敷包みや私が当時欲しくてうらやんでいたキックボードも捨ててありました。捨てていかなければ逃げ切れなかったのだと思います。逃げた先でようやく腰を下ろし振り返ると、前

女の校舎が真っ赤になり一斉に火を噴いたのが見え、家も燃えてしまったのだらうと思いました。一夜明けて家に戻ろうとしました。焼け跡の中では見当がつかず、残った電信柱を目印に帰りました。そこで見回りをしていた父にも無事に会えました。コンクリートには火の焼け跡が残り、かまどに仕掛けていた米が炊けていたほどの火力でした」

他にも、焼夷弾が校庭に田植えをしたように刺さっていた光景やガスタンクの爆発によって担架を引く人々のシルエットが見えたことなど、空襲の日のは鮮明に覚えていると語る田村さん。幼い自分にとってそれだけ強烈で、怖いものだったと話します。

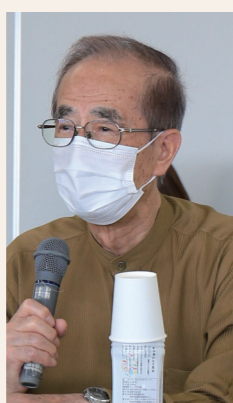
## 現代を生きる若い世代へ

田村さん「戦争が起きるような状況では、言論統制などで真実が伝わりづらくなります。戦いで多くの人々が被害に遭い、人間が変わってしまう怖さがある。だから、難しいことだけれど、本当のことを知る「正しい目を持つ」ことが大切だと思います」

令和2年3月、前橋空襲を語り継ぐ資料館であった「あたご歴史資料館」が、運営する地域住民の高齢化などの理由から閉館しました。市や市民、自治会・市民団体からなる「前橋空襲を語り継ぎ、平和資料を収集展示の形の検討会」では、この資料を活用しようと新たに資料館を開設し常設展示を目指す方針を決定。「前橋空襲と復興資料館検討委員会」を設立し、6月29日に第1回の会議を開催しました。

市文化スポーツ観光部長を含む4人の委員が、事務局から全国の資料館設立の事例について説明を受けました。

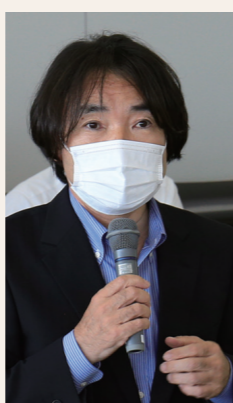
県立県民健康科学大講師・岩根承成さんは、「資料館として披露するためには、新たな資料の収集を並行してする必要があります。また、展示や資料の保管だけでなく、前橋空襲そのものの研究を合わせて進められるといいと思います」と設立への課題などを共有。



岩根さん

群馬地域学研究所代表・手島仁さんは、「空襲については、市民学芸員の皆さんも研究を重ねています。歴史研究者でなくても、関心があれば自分たちで調べられる時代。そういう人が増えて成果が

上がれば、市民が作り上げるような資料館ができ、たとえ面積は小さくても充実した資料館ができるのではないかと話しました。



手島さん

日本女子大名誉教授・吉良芳恵さんは、「資料を集めたあと、学校や社会教育でどう生かすかも考えておかなければなりません。遠くから来ている戦争を、どうやって未来の平和に生かしていくかを考えることが必要」とし、平和教育への活用についても確認しました。

検討会では、昌賢学園まえばしホールのフリースペースを活用し常設展示を目指すこととして検討を進め、現地を確認。今後も学習会などを重ね、資料館開設を目指します。



吉良さん

## 空襲などの関連資料を展示します

市役所1階市民ロビーで、前橋空襲と広島・長崎原爆パネル展を開催。旧あたご歴史資料館から寄贈された平和関連資料も一部公開します。また、戦災者への冥福を祈り、空襲や原爆投下の時刻に黙とうをささげてください。

時〈展示〉8月17日(水)まで〈黙とう〉8月5日(金) 22時30分・6日(土)8時15分・9日(火)11時2分  
関生活課  
☎027-898-6236

## ワカモノ記者編集後記



中村 77年前の記憶を鮮明に、紙面では書ききれない

ほどたくさん話してくれました。それほど当時の経験が悲惨で強烈なものだったのだらうと感じます。このような経験談を忘れないためには、若者が後世に引き継ぐ必要があります。家族や親戚など、身近に戦争を経験した人がいれば、ぜひ一度話を聞いてみてほしいです。



梶田 戦争は一生人の心の傷として残るのだなと実感

しました。また、もっと早く当時のことを思い出して語り継ぐ必要があったと話していたことから、私たちが若者は戦争について考え、知り、学び、情報を正しく読み取る力が重要だと思いました。



田村さんのインタビューの様子は本市公式YouTubeで公開しています。

# 資料を保存し継承する

前橋空襲と復興資料館検討委員会



あたご歴史資料館に展示されていた展示品の一部。